

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(「20 世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enoco のコレクション」展)

駒田 裕紀

はじめに

私は大学で文学部哲学倫理学専修に所属している。同専修所属の先生のご紹介で、私自身の進路決定の参考とするために、今回のインターンに参加した。私は現在大学で学芸員資格を取得する課程を取っているため、今回の経験は大きなものとなった。以下、その詳しい内容とインターンを通して学んだことについて述べていく。

(1)展覧会作りについて

インターンは7月から12月にかけて行われた。最初にインターン開始から展覧会完成までの過程を述べる。

7月2日に開講式が行われ、そこで展覧会の担当章の発表(5つの章からなる展覧会を企画した)があり、インターン生の顔合わせ、今後のスケジュール確認を行い各章の作業に入った。私は「日本の写真—20世紀後半を中心に」という仮タイトルがつけられた第2章を担当した。

スタッフの方と連絡を取り合いながら企画展のプランを形作り、29日には中間発表として全員の前で各々の章の展示方針を共有した。またその同日には吉田忠司さんによる、「大阪の写真表現史—近代写真の担い手からの遺産」と題した講演会を聞いたが、これは写真史に関する知識を実際にその世界で活躍されている方から受けられる、貴重な機会であった。この講演を聴く前は、どのように写真界、写真家について調べてよいのか分からない状態であった。同日にあった中間報告もあまり踏み込んだものにならず、章タイトルを決め作品に目を通しいくつか選んでみた程度であり、とても調査の成果が出ていたとは言えなかった。それは、(私の芸術分野に対する偏見ともいえる大きな勘違いでもあったが) 出展作品を決めるのには感性的なものが大いに求められ、来館者をはじめとするいかに多くの人とその感性が一致するかが美術館での展覧会における1つのポイントになってくると思い込んでいた。そのような考えのもと作業をしていたため、大きな成果が得られなかったのだと、振り返ってみてそう感じる。この講演会では、写真家と写真の紹介を歴史の進行とあわせて紹介されていた。この講演を聞いたときも、正直自分の未熟さ故に理解できなかったことも多かったが、私はこの講演会でどのように調査を進めていけばいいのかを教えられたような気がする。写真の展覧会であるためもちろん写真、写真家と向き合うのも大切であるが、それはその写真家が生きた時代背景に関する深い理解を身につけて初めて行われるべきことであり、そうしないとどれだけ時間を費やしても得られるものは少なく、背景の歴史からじっくり把握していくことが一番の近道なのかもしれないと思われた。

その後8月に入ると出品作品を決定し、チラシのデザインも始まった。

出展作品を選ぶことは、先にも述べたようなこともあり、私が一番苦勞したことの1つであった。私は、20世紀後半に起きた最大規模の出来事であるということが出来る第二次世界大戦を軸に、大戦が写真界にどのような影響を及ぼしたのか、その後どのような発展を遂げたのかを紹介する、ということコンセプトに出展作品を選んだ。また、歴史に沿って作品を紹介していく方針になったため、作品の制作年や作者が偏ることのないように選出し、制作年度順に展示することにした。かつ、この時代は白黒写真からカラー写真への移行期でもあるため、それに関しても片方に偏らないよう気を遣った。

それは、もし今挙げたいずれかが偏ってしまっていると、偏った要素が20世紀後半に見られる1つの特徴だと捉えられてしまう恐れがあるためである。確かに特徴を伝えるために敢えて偏りを見せるのも1つのメッセージ性であるとも考えられるが、今回はできる限り偏りを見せない方向で選出した。例えば、私の章で杉本博司の作品を2点出展することにしたが、ほかの作者は1点ずつであるため、「20世紀後半の写真家といえば杉本博司」という印象を与えてしまう。今回は、杉本博司を前面におしだして紹介するのが目的ではなく、「20世紀後半の写真界の紹介」が目的であったため、自分たちが定めた目的、メッセージとは異なるものが伝わってしまう可能性がある。結局杉本博司の作品に関しては、2つ並べて観ることでその撮影方法の特徴が分かりやすいという理由でそのまま展示することにしたが、そのような事にも気をつける必要がある。その他にも、「どうして同じ作者のこの作品Aではなく作品Bを選んだのか」「どうしてこの作者は出すのにこの作者は出さないのか」など、想像以上に多くのことを同時に考慮する必要があった。

その作業と同時に、学生によって開かれる展覧会の関連イベントの企画も始まった。中旬には中間発表が行われ、そこではイベントとしてピンホールカメラを作って実際に撮影するという体験型のイベントをすることに決まった[詳細については(2)で述べる]。

9月、10月には紙面で思案していた展示企画を実際に形にしていく作業が始まった。ここでは、展示スペースの使い方をより具体的に決め、選んだ作品をどのような配置にするか(これは先に述べた選び方で選んであったため大まかには決まっていたが)、展示室のレイアウト図をもとにして展示室内はどのような順路にするのか、来館者の作品を見る視線は自然に移動できるかなどを考慮した。

また11月に行われる、キャプション、パネル作成に向けて、それぞれ自らの担当章を少しでもわかりやすく伝えられるよう、解説文の執筆が始められた。この執筆も非常に難しかった。というのも、この時点で背景の歴史などについてはある程度の理解があったと思うが、それを写真に関する知識の深さが1人1人異なるどの来館者が読んでも理解できる文章を考える必要があったからである。また、私は写真の初学者であったため学んだ背景知識を写真に繋げて説明するというのが難しかった。「第二次世界大戦」を説明するにしても、「1939年に勃発した、5000万人以上の人々が犠牲となる…」と説明してくのだが、ただ戦争について説明したキャプションが展示室に掲げてあっても、「それがどう展示に関係あるのか」ということは、写真に関する知識がないと伝わらない。世界大戦が写真界に及ぼした影響を大

戦及び戦後の生活の説明などと一緒に、決められた字数の中で説明することは苦勞した。執筆する際には何冊かの写真史に関する書籍、資料を読み、自分の言葉でまとめるという形をとった。

11月に入りキャプションやパネルに書く文章が完成した頃、展示レイアウトも決定した。レイアウトは9、10月に行った作業をもとに、どの作品をどこに配置し、隣の作品、あるいはパネルと何cm距離をとるのかなど、具体的な数字を決めていった。中旬にはキャプションとパネルの切り出しが行われ、自分が担当した章のパネルをそれぞれ切り出す作業を行った。これはカッターを使った単純作業であったが作業に慣れるまで時間がかかった。何枚かのパネルは作り直しにもなった。頭を使う作業はもちろん大切ではあるが、このような技術的な作業も学芸員の重要な仕事であり、その技術力の高さも学芸員には問われていることを知った。そして21日には展示作業が行われた。展示作業には美術品取扱業者の方々と一緒に作業を行った。そこではインターン生は主に展示レイアウトを元に指示を出し、展示室を完成させていった。

11月22日～12月16日の展示期間を終え、17日には撤去作業を行った。その際にも美術品取扱業者の方々と一緒に作業を行った。この展示作業、撤去作業では、基本的に私は作品および照明に触れることは許されていない。業者の方々のみ扱うことができる。つまり私たちインターン生は業者の方々に指示を出して、作品を動かしていく。これにはいかに事前に入念な準備がされていたかが問われる作業であった。私も完成したレイアウトをもとにシミュレーションを行ったうえで当日を迎えたが、業者の方々に的確な指示を出すことができずレイアウトのように作品を置くことに苦勞することもあった。また照明を動かして照度を調節する際も、照明の角度をどう動かせばいいのか瞬時に判断して指示することに苦勞した。全ての章が同時に作業できるわけではないため、自分が遅れをとると全体の進行が遅れてしまう。そのような常に緊張した状態の中で作業を進めていた。この実際展示室で行う作業では、頭で思い描いているイメージを誰にでもすぐ理解できる言葉で表現し、的確に指示する能力が必要であることを知った。展示作業経験のある方の指示の仕方を見て、私自身も真似しながら指示を出そうとしたができなかった。経験を積んでいるか否かと言うこともこの作業では大きな差があったように感じる。

また、後にも詳しく述べるが、展示期間中には、展覧会関連イベントとして企画したイベントも開催された。

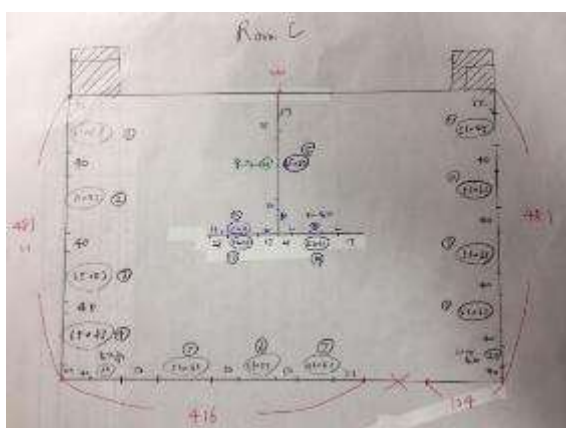
インターン生はそれぞれ通っている大学が異なるため、展覧会企画開始から展覧会開会までの間、それぞれの章ごとで連絡を取り合い、計画を練り進めた。またその際には、スタッフの方々の助言を頂きながら話を進めていった。

展覧会企画一連の過程を通して、情報共有の重要性、またインプットした知識とアウトプットできる知識の違いを思い知らされた。先にも述べたが、インターン生同士が普段直接会って話し合いをすることは、通う大学が異なるためなかなか困難であった(インターネットを利用すれば話し合うことはできるが、直接会って話すほどにはうまく話が進まない)。

そのため、話し合える機会も限られてくるが、それまでに個人個人で進めた企画案は頻繁に共有しなければ話し合った時に大きな無駄を生んでしまうということを知った。当然のことではあるのだが、当時の自分は時折自分自身の都合のよい解釈をして1人進んでしまっていたときもあった。

学校で学んだ博物館学の知識がそのまま行われていたことも多くあった。しかし、頭ではどのように作業が進んでいくのかが分かっていても、上手く動くことができずに注意を受けることが多かった。展示作業での作品の展示位置、照度の調節作業などがその例である。適切な照度であったり、作品を展示する高さであったりということは、授業中にも扱われ数値も(細かくではないが)知っていたが、当日は動けなかった。知識として頭の中にはあっても実際にそれを実践する機会があるのとないのでは大きな違いがあることを知った。

「知っているからできる」という自信を持つことも大切ではあると思うが、それでいてかつ謙虚な態度で分からない点はアドバイスを求める。また、共に作業を進めるメンバーに対しては、調査が少しでも進んだり気になる点があったりすれば小さなことでもその都度連絡する。このような小さな心がけが重要であり、今後そのような点に気をつけることができると思う。



展示作業で使用したレイアウト



展示作業の様子①



展示作業の様子②



展覧会のチラシ

(2)ピンホールカメラワークショップについて

展覧会開催中の11月25日、26日、12月10日の3日間には、「ピンホールカメラで撮ってみよう」と題して、体験型イベントを開催した。このワークショップでは、空き箱を使ってピンホールカメラを作成し、それを使って屋外で写真を撮り、その写真を現像するというものであった。それぞれの担当日を決め各回10名前後の参加者とそれを行った。写真の現像は1人につき2回行い、そのうちの1枚を展覧会の展示室近くに展示した。

このワークショップを開催するにあたり、インターン生は言わずもがなではあるが事前にピンホールカメラの構造や原理、実際の作り方や現像の仕方、そして印画紙や暗室などの扱い方も知っておく必要がある。そのための事前レクチャーを11月12日に行った。私は参加できなかったため、後日他の参加者から情報を共有してもらった。しかし、情報共有を受け大まかの要領は把握できたものの、やはり実際に作業をしていないため当日はサポートの役割にしか就くことができなかった。当日に向けた打ち合わせには参加できたため、その際に不明瞭な点はすべて聞いておくべきだった。また事前レクチャーに参加できない事がわかっていたため、参加する人に写真とまとめのプリントだけでなく、動画などで作業の撮影などもお願いして、より理解を深めようとする努力をするべきだった。

ワークショップは3日間あったため、そのうち2回目まではその日の反省点と改善点をその日のメンバーでまとめ、次の担当のメンバーに共有することで次回のワークショップのよりスムーズな進行をはかった。1日目と3日目は子どもを対象とし、2日目のみ対象年齢を設けず誰でも参加できるようにした。私は2日目を担当した。

このワークショップは、実際に写真を撮りに行くためワークショップの進行具合が当日の天候に大きく左右される。天気が悪いほどカメラの露出時間が長くなるのだが、2日目は天候が悪く撮影時間は1日目のそれよりもずっと多くの時間を要した。撮影する場所によっても大きく時間に差ができるため、カメラ完成までの時間の差よりも大きく進行具合に差ができてしまったこともあった。

1日目のワークショップを終えて挙げられた反省点の核としては、効率よく作業を進め時間をいかに短縮するかがワークショップ成功の鍵であるということであった。というのも、子どもたちの集中力を考慮して、あまり1つの作業に時間をかけると子どもたちの集中力がもたず、まとめるのが難しくなるからである。2日目は子どもの参加者は少なかったが、そのことに気を遣いつつ、さらにインターン生の数も当初の予定であった3人から5人に増やして行った。結局、1日目のメンバーが話していたような大変さはあまり感じずにすんだが、それでもやはり子供たちに付きっきりになりがちになってしまうこともあった。

また2日目を終えて挙げられた反省点は、天候が悪かったため当初の予定とは大きく外れた動きを余儀なくされた事(人数を増やしていたためにその状況になんとか対応できた)、そしてワークショップには最低5人のインターン生が必要ということだった。企画段階では1日につき3人のインターン生がワークショップをリードすることになっていたが、2日目の子どもが少ない日でありかつ5人のインターン生が揃ったのでそれが精一杯で

あった。よめない天候、子ども達の行動、他に考え得るトラブルなどを考慮して、3日目に向けて追加人員を募り、3日目に備えた。

このワークショップを通して、子供たちや参加者の方々と一緒に知識を共有し喜んでもらえる姿を見ることができた。多くの準備、打ち合わせを重ね、不安要素がある中ではあるがワークショップを無事に終わらせることができた。そのような、知識を共有することの、それに関してプラスな反応をもらうことができたというやりがいを感じた。これは学芸員の仕事の中で感じることのできる1つであると思うので、それを実感できてよかったと思う。そしてワークショップというのはどれだけ入念に準備を入れたとしても毎回同じ展開になることはなく、臨機応変な行動を必要とされることを知った。そのような事を頭に入れた上でワークショップを行うことができたなら、もう少し効率よく、また楽しんでもらえるようなものに来たのではないかと感じる。そしてやはりここでも、自分が得た情報、学んだことを次のワークショップを行う人たちに共有するという事の重要性も同時に学ばされた。



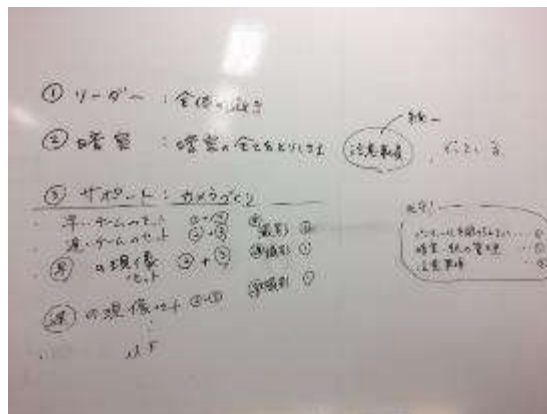
事前ワークショップの様子



事前ワークショップでのレジュメ



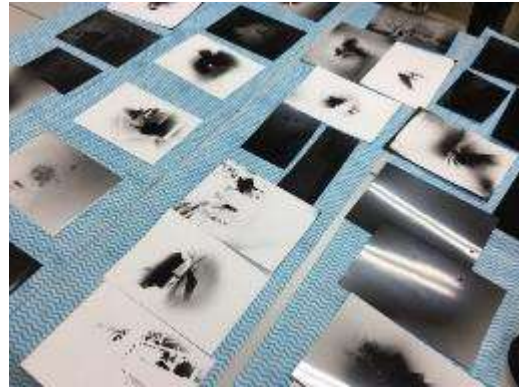
現像の様子



ワークショップの打ち合わせ



ピンホールカメラで撮影した写真



現像後は並べて写真を乾かす

(3)研修全体を通じた振り返り

今回の半年間に及ぶ大阪新美術館建設準備室でのインターンを通して、学芸員という仕事の大変さややりがい、またどのような点に気を配り業務を遂行しているのかを垣間見ることができた。それは大学で学んだこと以上に印象に残り、「使うことのできる」知識として定着したと思う。

特にワークショップは、「自分たちが企画したイベントを、自分たちは“主催者”の立場として、“お客さん”をお迎えする」といったものであり、そのような大きな責任のある立場でそのようなことを行うのは初めてであったため、とても緊張する神経を使った経験であった。しかしそれによって、その経験は身をもって強く自分の中に吸収された。

また作品展示と作品撤去の際に美術品取扱業者の方々と一緒に作業を行ったことで、それによって学芸員以外の博物館施設に関わる職業というものを知ることができた。私はそのような職業があるという事実だけを漠然と知っているだけの状態であり、具体的にどのような作業を進めていくのかなどは全く知らなかったため、とても新鮮だった。

そして何より、自分自身の力不足さを痛感する半年間でもあった。スタッフの方々と関わっていく中で、「来館者の立場に立ってみて、誰でも理解できる内容か」「展示のコンセプトにかなった、コンセプトがはっきり伝わる作品選出か」「ワークショップで、本当に伝えたいことは何か」など、今与えられた課題をこなすことで精一杯になっていた自分が全く意識できていなかった視点からの客観的で冷静なアドバイスや注意などを多く受け、自分の視野の狭さ、博物館学における未熟さを知った。さらに、指摘されてもなおそれを修正することに苦戦し、足踏みすることもあった。作品選出の際には、アドバイスをもらっても選出作品に偏りが認められ、コンセプトが伝わりにくい展示になっていると、同じ指摘を受けたが、コンセプト、偏り、その他の必要な要素を全て加えて作品を選ぶのに苦労し、それらをクリアすることがなかなかできなかった。未だ多くの知識が、パッシブな状態なままである。今後も博物館学の授業は大学で続くが、今回のインターンのことを振り返りながらそれらを学ぶことによって、より深い理解につなげてアクティブなものとして吸収していきたい。

また私は、今回のインターンで初めて写真の世界に触れた。今まで“写真”について深く探求したことがなく、それに関する知識も皆無な状態での参加であった。その中での展覧会企画は私にとって大きな壁であった。いかに分かりやすく伝えられるか、思考を巡らすことを迫られたが、この経験も自分にとって大きなものとなった。私自身知識がないため、見に来てくださる写真の世界に初めて触れる来館者の立場に立って考えることができたのは大きかったと思う。この事を踏まえ、自身の知識がある程度深くまで行き届いている分野を担当する際も、その分野に初めて触れる人の立場に立ち展覧会を企画することが、多くの人に観てもらえる展覧会になる1つのポイントなのではないかとも感じた。

さいごに

今回のインターンを紹介して下さった大学の先生、また大阪新美術館建設準備室、江之子島文化芸術創造センターの職員の方々、また私たちのインターンで関わって下さった方々に、心からお礼申し上げます。